

自分も大事、みんなも大事なぼかぼかたまゆっ子の育成
～人とのあたたかい関わりを通して～

I 主題設定の理由

本園は、園児30名（3歳児学級11名、4歳児学級12名、5歳児学級7名）の幼稚園である。

穏やかで人懐こく、心が安定している子どもが多い。戸外での遊びを喜び、どろんこ遊びや砂場での遊びなど体を思い切り動かして遊び、自分なりに遊びの内容を考え、工夫して遊ぶ姿が多く見られる。また、“これをしてほしい”“こうしてみよう”と遊びの意欲が高く、“明日もこれをしよう”“昨日の続きから”など継続して遊ぶことを楽しむ姿も見られる。

友達との関わりでは、一緒にいること、遊ぶことを喜び、困っていたり悲しんでいたりと声をかけ、気持ちに寄り添った姿が見られる。また、子どもたちを全職員で育てていくために教師間の連携を大切にしており、異年齢の関わりが生まれやすく、互いに刺激を受けながら生活をしている。一方で、子どもの人数が少ないため、人との関わりや遊びが固定されやすい傾向にある。また、人と衝突することを避け、自分の思いを言葉で表すことができにくい姿が見られる。

保護者の実態として、日々の保育の内容にも関心が高く、子どもを園と一緒に育てていきたいという思いが伺える。送迎の際には、保護者同士で子育ての悩みを情報交換する姿も見られる。一方で、子どもが失敗しないよう先回りの対応や、子どもができることも保護者がやるなど過干渉な面も見られる。

幼稚園の同敷地内に玉湯学園があり、1年生との交流や学園生の読み聞かせなどの交流活動を行っている。あわせて、玉湯町内の保育園との課程別交流・なかよし遠足などの交流活動は年間を通して行っている。また、園の教育活動に理解を示す地域の方が多く、行事への参加や情報提供など、地域全体で子どもを育てる土壌があり、青少年育成協議会、学校保健連絡会などの組織化も図られている。

このような本園の実態から、様々な人と関わることを大切にすることで、「自分は周りの人に受け止めてもらっている」と感じ、自分の良さに気づき、自分の思いを伝え、相手に心を寄せることができるようになるのではないかと考えている。また、人との関わりを大切にすることで、自分に自信をもち、試行錯誤を繰り返しながら、主体的な生活や遊びを創り上げていくことができるのではないかと考え、本主題を設定した。

II 主題の受け止め

主題については以下のような受け止めをしている。

自分を大事にするぼかぼかたまゆっ子	みんなを大事にするぼかぼかたまゆっ子
<ul style="list-style-type: none">・自分っていいなという思いを持っている子ども・自信をもって生活している子ども・自分らしさを安心して出せる子ども・自分で考え、判断し、行動できる子ども・意欲をもっている子ども	<ul style="list-style-type: none">・一緒にもっと楽しいと思える子ども・友達の思いや考えに気づける子ども・思いやりをもって関わられる子ども・身の回りのものや生き物、草花を大切に扱える子ども

幼稚園生活において、教職員との信頼関係を築くことが安心・安定した生活を送る基盤である。一人一人の姿を多面的に捉え、ありのままの姿を受け止め、その子どもに沿った支援を重ねていくことで自尊感情を育み、自己を発揮し、生活への意欲につながっていくのではないかと考えている。

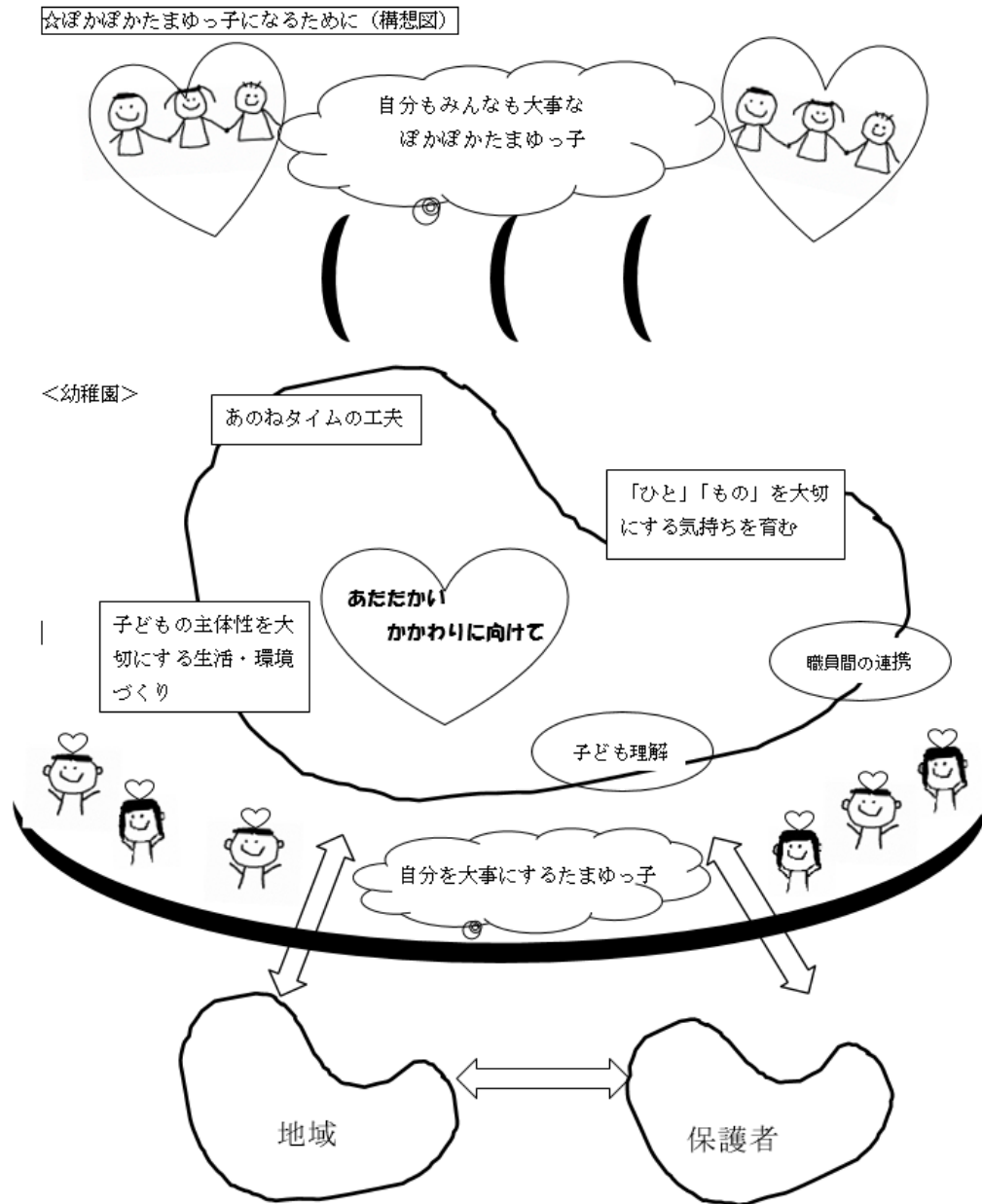
“みんなも大事”と感じるためには子ども達が、自分もみんなも同じように大事だと実感できるような関わりを経験していく必要がある。そのために、自由に使える製作コーナーやテラスで絵を描いたり図鑑を見たりするコーナーなど環境構成の工夫をし、子どもたちの自然な関わりができるようにしている。また、“あのねタイム”を設け、時間・場・内容などを工夫しながら、グループや各学級、異年齢の集合の場等で子ども達が伝え合う、認め合う、考えを出し合う機会を提供していく。“あのねタイム”を設けることで、子どもが自分の思いを素直に言えるようになり、異年齢との関わりを通して柔軟な考え方や表現の仕方があることを知り、互いに刺激を受け合うことができるよう支えていきたい。これにより、「みんなと一緒に楽しいな」、「嬉しいな」と感じる心が育ち、自分達で考え、伝え合いながら協力して生活や遊びを創り上げていくことにつながるのではないかと考えている。

また、玉湯町は保護者、地域ともに“子ども達のためなら”という思いが強く、園庭環境の整備や、田んぼの提供など様々な協力を得ることができている。そのあたたかい人とのつながりを活かし、様々な年齢や立場の人との関わりを通して、子どもの生活や遊びがより充実し、自分は大切にされていることを実感したり、人と関わることを楽しいと感じたり、さらには人・もの・ことを大事にする子どもになるのではないかと考える。

以上のことから、自分も大事、みんなも大事なぼかぼかたまゆっ子を、様々な人とのあたたかい関わりを通して育てていきたいと考えて実践をすすめていくことにした。

III 研究の目標

- ◎ 人とのあたたかい関わりを大切にしながら教師の援助や環境構成を考え、工夫することで、自分も大事 みんなも大事なぼかぼかたまゆっ子を育成する。



IV 研究の内容と方法

内容	方法
I 自分を大事にするための援助	ア 子どもを多面的に理解するための記録の工夫 ・写真記録 ・子どもを語る会（きらきらの会）
	イ 子ども一人一人の自尊感情を高める援助の工夫 ・子どものありのままを受け止める ・子どもの思いに寄り添った関わり
II みんなを大事にするための援助	ア 子どもの主体的な関わりを大切にする環境，生活づくり ・異年齢での活動 ・ぼかぼか広場（※）の環境構成の工夫 ・行事の工夫
	イ あのねタイムの工夫 ・自分も周りも大切にするあのねタイム ・発達に応じたあのねタイム ・視覚支援を用いたあのねタイム ・異年齢でのあのねタイム ・子どもが主役になるあのねタイム
	ウ 自分やまわりの「ひと」「もの」を大切にする気持ちを育むための援助の工夫 ・子どもと共につくる園庭づくり ・生き物とのかかわり 等

III 保護者、地域との連携	ア 子ども達の活動や成長の姿を分かりやすく伝えるための工夫 ・ぼかぼか広場マップの活用 ・スケッチブックの活用 ・連絡帳の工夫
	イ 保護者や地域と一緒に子どもの活動を支えていくための工夫 ・みんなのおうち作り ・親子で栽培活動 ・田んぼの活動 等
IV 教師の保育の質の向上	ア 教師間の情報共有、共通理解 ・一日の生活を通じた教師の援助の見直し ・週案会 ・学級経営案の見直しと工夫 ・日々の情報交換
	イ 研修への参加

V 評価

自分も大事、みんなも大事なぼかぼかたまゆっ子になるための教師の援助や環境構成について、“研究の内容と方法”を視点として評価を行う。

VI 実際の取組（事例の抜粋）

事例1 子ども達が主体的に楽しんで活動できる環境づくりに取り組んだ事例<5歳児>より
(内容II-ア, イ, ウ, III-イ)

【昨年度の取組】…令和3年度 5歳児事例

令和3年度より新園舎になり、新しい環境での生活がスタートした。新しい園舎を喜び、また年長児になったことで張り切って生活を送ろうとする姿が見られた。一方で、昨年度まで園庭や園舎内で様々な環境に触れながら生活してきた子ども達にとっては、新しい園庭に自然物など遊ぶための環境が十分に整っていなかった。そのため、「今の幼稚園も好きだけど、前の幼稚園がいいな」「つまらない」と自分の好きなことが見つけにくい姿、遊びの中での満足感や充実感を感じにくい姿が見られた。

5月11日【どうしたら幼稚園が楽しくなるか考えたあのねタイム】

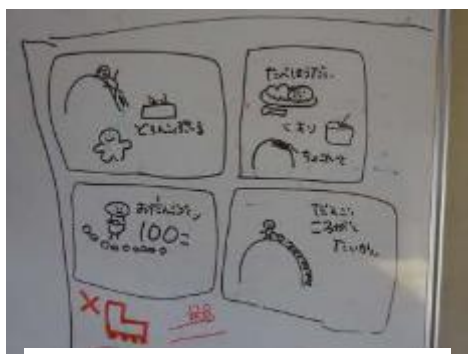
子どもの姿と教師のかかわり *状況 T…教師 子…子ども	教師の思い(・)や援助(○)
<p>*旧園舎への散歩に行った後のお話タイムにて</p> <p>T「前の幼稚園で遊んでどんなことが楽しかった？」 子「花をいっぱいもらったこと」 子「ジャングルジムで高いところまで登ったこと！」 子「前の幼稚園の方がいいな～」 子「僕も」 T「なんで？」 子「だって、花も草もいっぱいあって、すぐ色水できるもん」 子「僕も金魚やカエルが欲しい～」 T「そういえば、Aくんが遊んでいる時に赤土山も欲しいって言ってたね」 A「うん、赤土山欲しい」 子「今の幼稚園もいいけど、草とか欲しい」 子「登るのも欲しいな～だって高いところ好きだし」</p> <p>T「そっか、そういうわけでみんな前の幼稚園がいいんだね」 「でも、新しい幼稚園に引っ越ししてきたから、前の幼稚園には戻れないんだけど、今の幼稚園がいい！になるにはどうしたらいいかな？」 子「じゃあさ、草とかもってきたら？」 子「金魚やカエルももってこようよ」 T「前の幼稚園から持ってくるってこと？どうやってもってくる？」 子「まず、木を掘ってさ～トラックに積むのは？」 子「幼稚園作ってくれた工事の人にお問い合わせしたらいいじゃん」</p>	<p>・前の幼稚園がいいと言っていた子ども達。遊びに行ったことで具体的にどんなところが良かったのか意識できるようにしたい。</p> <p>・前の幼稚園がいいで終わらせず、自分達で場を創り上げていく楽しさを味わえるチャンス！</p>

<p>子「花の種をまけばいいと思う」 子「赤土は、シャベルで掘ってもってこよう」 子「山を押してもってきたいじゃん」 子「それは無理だよ～」</p> <p>T「いろいろな考えが出たね。みんなで今の幼稚園を楽しくできるようにこれから考えていくといいね！」 子「新しい幼稚園楽しくするぞ作戦だね！」</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 継続した話し合いとなるよう言葉をかける。 ・ 子ども達からも今後への期待が生まれる。
---	---

5月27日【作戦会議～赤土をどのようにして運ぶか?!～】

担任の思い

◎ *旧園庭に遊びに行った経験や普段の園庭の遊びの様子から、赤土があるとより遊びが広がっていくのではないかな。赤土運びをクラスの共通のめあてとし、そのための話し合いを作戦会議と名付け、話し合いを重ねていってみよう。



～赤土でこんな遊びがしたいな～

T「赤土どうやって前の幼稚園からもってくる？」
子「ショベルカーとかトラックかな？」
Tの思い：まずは自分達で運ぶ方法を考え欲しい。
T「トラックやショベルカー幼稚園にないんだけど、車以外で運べないかな？」

スコップはどう？

バケツに入れて運んだらいいんじゃない？

スコップはそんなに乗らないんじゃない？

バケツと掘るのに使うシャベル持っていこうよ！

5月28日【第一回赤土運び】

たくさん運ぶぞ～！



～旧園庭で赤土掘り～

あれ？頑張って運んだのに、こんだけ？？思ったより少ない。



～園庭に持って帰って赤土山にしよう～

もっと大きな赤土山にしたい。



～完成するまで赤土がくずれないようにしよう～

6月1日【うさぎ組，ぱんだ組にも新しい幼稚園楽しくするぞ作戦のことを話そう】



年長「うさぎ組さん，園庭のシートがかかっているところは赤土があるから触らないでね！」
年少「なんで～？」
年長「今，みんなで遊べるように赤土運んでるから！」
年少「いつになったら遊べる？」
年長「ぼくたちがいいよって言うまで待ってね。」

年長「ばんだ組さん、園庭のシートがかかっているところは赤土があるから触らないでね！」

年中「わかったよ！」

「ぼくたちも何かお手伝いすることがない？」

年長「ありがとう！今度一緒に赤土運んでみる？」

実際に年中児も年少児も赤土運びに参加をする。



6月8日【第2回赤土運び】



保護者も一緒に赤土運び

6月23日【第3回赤土運び】



年中、年少児と一緒に赤土運び

6月22日【作戦会議～旧園庭の工事が始まる～】

担任



赤土のことなんだけど、実は、9月から前の幼稚園を壊す工事が始まるから、前の幼稚園に入れるのは7月20日までだよってお知らせがきたよ。

まだ赤土が足りないという思いの子ども達。どうすれば自分達が思い描く赤土山ができるか考えを出し合った。

年長児



A児「車で運ぶのはどう？」

B児「車より軽トラの方がいっぱい積めんじゃない？」

C児「おじいちゃんが軽トラもってる！！だけど、仕事で使ってるからな…。」

D児「畑を貸してくれたHさん（地域の方）にお願いするのはどう？」

F児「でも、Hさんも仕事で使ってるかも。だめって言われたらどうする？」

担任



先生、前に大谷幼稚園ってところにいたんだけど、その近くに住んでいる人が軽トラもってたかもしれないから聞いてみようか？！

7月1日【作戦会議～Iさん（大谷地区の方）にお願いしよう～】

担任が連絡を取り、大谷地区に住むIさんという方からの協力を得ることができた。子ども達にそのことを伝えると、自分達がお願いの手紙とたまゆ幼稚園までの地図を渡しに行きたいという思いが生まれた。子ども達の考えたことを最後まで実現させたいと考え、子ども達と手紙と地図を作り、大谷まで持っていくことを計画した。

7月14日【Iさんをお願いしに行こう】



子ども
「今日はお願いがあってきました。」
「赤土を運ぶのを手伝ってください。」
「たまゆ幼稚園までの地図です。」

Iさん 「もちろん、手伝うよ！」



Iさん 「この車で赤土運ぶからね」

7月16日【赤土もってきたよ】



赤土, もってきたよ



子: Iさんってすごい!

子: Iさんありがとう



赤ちゃんの山だったのに、大人の山になった

赤土山完成~~!!!

〈考察〉

この活動を通して、子ども達は自分達で考えたことをみんなで苦労しながら実現させていく楽しさや満足感を味わうことができた。あのねタイムでは、子ども達の思いが共通のものとなっていきよう、“作戦会議”と名付け、絵を用いたり、教師が願いをもった投げかけを行ったりしたことで子ども達が「その考えいいね!」「もっとこうがいいんじゃない?」「それはこうじゃない?」などお互いを認めたり折り合いを付けたりしながら考えを深め、一緒に活動を進めていこうとする姿につながっていったと思う。子ども達の実態や思いを丁寧に受け止め、教師の願いをもちながらあのねタイムを重ねていくことで子ども達自身が考えたり、試したり、協力したりする意欲に繋がるのだと分かった。

また、この活動で他学年や保護者、地域の方を巻き込みながら進めていったことで、その後の遊びや活動においても、様々な人・もの・ことに触れながら友達と考えを出し合って自分達で遊びや活動を進めたり、“やってみよう”と挑戦したりする姿につながっていった。

開園の年だからこそ、今の環境をどうしたら良いのかを子ども達と一緒に話し合うことが出来た事例だと考える。そのことが今年度の子ども達にとって、どのように自分達で楽しい環境を創っていくのかを考えるきっかけになっていると感じる。

【今年度 5歳児の事例】

昨年度の年長児が開園年にまっさらな園庭で楽しい遊びを作っていくことを考え取り組んでいた。その思いを受けて、今年度の年長組の子ども達も、園庭で楽しい遊びをしたいと張り切って遊ぶ姿が見られた。しかし、スケーター、ブランコ、滑り台などの固定遊具で個々に遊び、友達と関わる姿が少ないように感じた。あまり満足感を感じていない様子が進級当初は見られた。

【意欲的に遊ぶと思っても言葉や表情で伝えられるようになったエピソード】

子どもの姿と教師の関わり	教師の思い（・）や援助（○）
<p>4月21日</p> <ul style="list-style-type: none"> 赤土でケーキ作りをする子ども 赤土に水を流す子ども <p>一人一人が色々な遊びを楽しんでいた。</p> <ul style="list-style-type: none"> 園庭に置いていた木切れを見つけるG児。 <p>G児「この木を使っておうちを作りたい！」 T 「どうやって作る？」 G児「木をつなげてみる。」 木を何度も運び出して園庭の真ん中に持ってくる。</p>  <p>その様子を見ていたきりん組の子ども達がやってくる。 A児「何やってるの？」 D児「いれて～！！」</p> <p>担任が木を固定する様子を見ていたE児 E児「私も木をひもでくくる！」と張り切って取り組む。 D児「ここのところに看板つけようよ。」 この時には7人全員集まっていてみんなで思いを出し合いながら取り組む姿になっていた。</p> <p>E児「きりん組の秘密基地だけど、きりんだけじゃなくて、ぱんだ組さんもいいよって書く。」 A児「看板が字だとうさぎ組さん分からないかもよ。」 E児「じゃあ絵も描いてみるか。」 B児「僕は、ここに自動ドアをつくるね。」 木とひもを使って工夫をする姿が見られた。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 遊びが転々とする姿が見られた。そこでみんなで泥に触れて遊ぶ日に見よう。そこで何を感じるかどんな関わりが生まれるのかを探ってみよう。 G児がやりたい思いを伝えてきた。一緒に遊びに向かいながら支えていく。 <p>○担任はビールケースなどもある事を知らせ、固定の部分は手伝った。</p> <ul style="list-style-type: none"> G児がいきいきと材木を運んだり、組み立てたりする様子を見て「おもしろそう」と感じたと思われる。一緒に関わって遊べる場になるのではないかと考えた。  <p>○担任は、紙、マジック、養生テープを用意する。</p> <ul style="list-style-type: none"> 子ども達同士でやってみたい事を考えたりしたら異年齢の友達に伝わるのかを考えたりしている。ひとつのめあてになったことで満足感や充実感を感じられたのではないかと考えた。

<気づき>

遊びが見つかりにくい様子が見られたので、この日は全員で同じ遊びをしようという提案をして意図的に遊びを経験することを目的にした。そこでは、赤土山でそれぞれ楽しいことを見つけて遊び始めたのだが、一人の子どもの提案を受けて担任も一緒に楽しんで取り組んでいくことで、少しずつ周りの子どもにも楽しさが広がり、周りの子どもも関わるようになっていった。最終的には7人全員の遊びになっていったのだが、ここで担任は子どもがどうしたいか、何がやりたいのかを聞きながら、必要なものを提示したり、一緒に作ったり、できた時は一緒に喜んだり見守ったりする援助を行ったことが、子ども同士をつなぎ、みんなの楽しい遊びにつながったと考える。

子ども達は、楽しい思いや充実した思いを感じると、自然ともっとこうしてみたいという発想や大きな意欲につながる事を改めて感じた場面であった。

【その日のあのねタイムでは】

できたてのきりんぐみの秘密基地のところであのねタイムを行うと、
→遊んですぐなので思いを伝えやすい。
→現場を見ながら思いを話しやすい。
→みんなで工夫したところや楽しかったところが視覚的に伝わりやすいので会話がはずんだ。

たのしかった！！

やねもつけたら
よくない？

とりあえず
このブルーシートを
つけよう。

もっとみんな
は入れるように
ひろくしたい！

みんなのおうちに
なりそう！



ごちそうも
たべられるようにし
たい。

<気づき>

みんなが作った場であのねタイムをした事で、話したいという姿がいつもよりもたくさん見られた。「もっと～したい。」「また明日もやりたい。」など次への意欲的な思いもたくさん生まれてきた。自分達の楽しい遊びを創りだした初めの一步であると感じた。

【僕たちのおうちに勝手に入ってほしくない・・・】

4月22日

次の日、登園して準備をするとすぐに園庭に出かけて木を運んだり、その場で遊んだりする姿が見られた。また、楽しそうな場に気付いた年少、年中組の子ども達もみんなのおうちに入って遊ぶ姿が見られた。

年少組に入ってほしく
ない年中組の子ども

楽しい場を見つけて何
も言わずに入って気ま
まに遊び始める年少児



何も言わずに入られるのは
嫌だと感じる年長児
→紙に絵を描いて伝える

年少さんもいいのではない
か？でもぐちゃぐちゃにし
てほしくない年長児

<気づき>

きりん組の子ども達が作った場所に、異年齢の子ども達が入って遊ぶ姿を見た年長児。最初は、嫌だという思いを伝えられずに困っている様子であった。教師が「どういう思いだった？」と聞くと、嫌だった思いを少しずつ話す事ができた。それを聞いた年中、年少組の子ども達にも伝わり、年長組の子ども達に聞いてから遊ぶ姿が見られた。一方で、「みんなのおうちだから入って遊んでもいいのでは？」という子どもの思いも出てきていた。教師がその場ですぐ答えを出すのではなく、子ども達の葛藤も大切にしながら様子を見守ることにした。そうすることで、年少組にも分かる看板を作ったり、「ぐちゃぐちゃにはしないでね。」ということを自分達で伝えたりする姿につながっていったと思われる。

【みんなのおうちでの遊びの継続】 5月中旬



異年齢混ざって温泉づくり

・砂場に水が溜まらない事に気付いたF児、G児。
→ブルーシートを敷いて水をためる事を考えた。
→水を運ぶ、といをつなげて流す、ブルーシートを固定する。

継続した遊びの展開
異年齢の関わりが生まれる



・紙に描いてみんなに知らせたいという思いから作っていた。
 →濡れてやぶれてしまう事に気付いたC児、F児。
 ・押し花遊びをしていたのでそれを活かしてラミネートした看板に変えた。



みんなのおうちの看板づくり

遊びの工夫…以前の経験を活かす



・遊んだ場であのねタイムを行うので、その日の遊びをリアルタイムで伝え合えた。
 ・日差しが強くなってきたので子ども達が屋根をつけたいと考え、日よけをつけた。
 ・みんなのおうちが拠点となり、様々な遊びをし始めるが、必ず戻ってくる場となり安心して遊ぶ姿が見られた。

みんなのおうちで続いたあのねタイム

<気づき>

遊びの発展を急がず、子ども達の遊びを見守り支えていく姿勢で接することで、自分達で工夫しながら遊ぶ姿につながってきていた。また、教師は子どもの遊びを見守りながらも、子ども達の思いや興味が今何に向かっているのかを探り、タイミングを逃さずに必要なものを提示したり、子どもと一緒に用意したりすることで、遊びが途切れずに日々新しい考えや形になっていったように感じた。

【みんなの遊び場（園庭）に名前をつけたい】

子どもの姿と教師の関わり	教師の思い（・）や援助（○）
<p>6月1日 E児「お庭に名前があったらみんなのおうちももっとたのしい場所になるんじゃない？」 T 「じゃああのねタイムでお話しようか。」</p> <p>あのねタイムにて… E児「お庭の名前をつけたいんだけどどうかな？」 B児「いいんじゃない??」 C児「名前?なんで?」 E児「みんなのおうちがもっと楽しくなるんじゃないかなって思って。」 子ども達「いいよ。」 T 「たまゆ幼稚園のお庭ってどんな遊びが楽しかったり、遊んでいるとどんな気持ちになったりする？」 B児「おうちでいろんなもの作ったりするのが楽しい。お日様もあるからあったかいかな。」 A児「○○ちゃんと一緒に遊べて、スケーターもできるし楽しい。」 F児「ぼかぼかするね。楽しい場所。」 B児「じゃあ、あったかひろばがいいな。」 E児「ぼかぼかひろばがいいんじゃない？」 D児「ぼかぼかあったかひろば。」 G児「ぼかぼかたまゆっこひろば。」 T 「たくさん出てきたね。どうやって決める？」 E児「どうしよう。でも、うさぎさんも、ぱんださんも分かる名前がいいんじゃないかな？」 T 「じゃあ、明日ぱんださんも一緒にあのねタイムしようか。」</p>	<p>・みんなの楽しい場所にしたいという思いがあるのだということが分かり、その気持ちを学級のあのねタイムで取り上げて話してみようと考えた。</p> <p>・子ども達は園庭での遊びをどのように捉えているかを聞きだし、そこから名前を考えていきたいと考えた。</p> <p>・昨年度から“ぼかぼか”という言葉を発表会や運動会で使っていた。昨年度の年長児が考え心がぼかぼかするという言葉を覚えていたのだと思った。</p> <p>・子ども達が“ぼかぼか、あったかい”というイメージを持っていることが分かった。この事を元に全園児で話をしてみんなの広場の名前を付けたい。</p>

<p>なかなか決まる様子が見られず、話し合いが停滞してしまっ</p>	<p>○子ども達の考えをホワイトボードに書いて、考えを視覚化した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・たくさん考えが出てきたことで、子ども達が迷ってしまっている様子が伺えた。異年齢の友達も一緒になって考えてみたらまた違う考えが出るのではないかと考えた。
------------------------------------	--

<p>6月2日 みんなのおうちでぱんだ組と一緒にあのねタイムをした。</p> <p>T 「今日はね、きりんさんがお庭がもっともっと楽しくなるように名前を考えてて、ぱんださんも一緒に考えてほしいなと思ったんだ。」</p> <p>H児(年中)「おなががあったかくなるからぼかぼかひろばがいいな。」</p> <p>I児(年中)「みんなの場所だからたまゆっこひろばかな。」</p> <p>E児「じゃあどれがいいか手をあげてね。」</p> <p>一つ一つ聞いていき、多数決で決めようとした。</p> <p>2人以外が“ぼかぼかひろば”に手をあげた。</p> <p>B児「僕はぼかぼかたまゆっこ広場がいいな。」</p> <p>I児(年中)「私も。」</p> <p>A児「でも、みんなのお庭の名前だから、みんなできめんと！」</p> <p>T 「そうだね。誰か一人でもいやだなと思ったらそれは決められないよね。」</p> <p>B児, I児とみんなの話し合いがさらに進んだ。</p> <p>E児「ぼかぼかたまゆっこ広場だと長いけん、年少組さんが分からないんじゃない？」</p> <p>B児は黙って聞いていた。</p> <p>A児「そうだよ。みんなが分かる名前がいいよ。」</p> <p>B児「そっか。じゃあぼかぼか広場にする。」</p> <p>I児「ぼかぼか広場でいいよ。」</p> <p>T 「Bちゃんが考えた違う名前も素敵だったし、みんなの意見を聞いてやっぱり変えないと思うこともいいと思うし、でもみんなのことを考えて変えたよっていうのもいいと思う。それに、Dちゃん、Aちゃんが自分達だけじゃなくて年少さんの事も考えている事はすごい素敵な事だね。年少さんも嬉しいと思うよ。」</p> <p>最後はみんなが納得して“ぼかぼかひろば”に決定した。うさぎ組の子ども達もテラスから聞いていたので、伝えてみんなの思いを共有した。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・年中児も思いがあることを知った年長児。みんな考えることでまた考えが広がった。  <ul style="list-style-type: none"> ○移動可能なホワイトボードに今出ている名前候補を書いて見せた。 ○自分達で二人に話しかけているので見守ることにした。B児, I児の思いもしっかりと伝えていけるようにしたいと考えた。 ・自分達の思いだけでは決まらないことを知ったB児の思いの変化も、自分達だけじゃなく年少児のことも考えていたD児, A児も両方すごいと感じた。このことを周りにも伝えたい。 ・教師が答えを急がずに自分達で納得いくまで話し合いを行えたことで、思いを言ってもいいのだという考えでみんなに伝え合えることが出来たと思われる。
---	--

<気づき>

みんなの庭をもっと楽しいものにしたいという子ども達の思いを汲んで、話し合いを重ねた。話し合いを重ねる中で、自分の思いは伝えられるが、なかなかまとまらず困ってしまう場面も見られた。教師はそこで答えを急ぐのではなく、子ども達の楽しい場になるためにどうしたら良いかを一緒に考えていくようにした。そうする事で、年中組と話し合いをして、みんなの意見を聞くことができ、自分達の考えだけでなく、みんなの考えも知り、時には思いを譲ることも大切であることを感じていた。

【緊急事態発生!!!】

6月17日

ほかほかひろばの砂場の砂を足すため、トラックが園庭に入ることになり、みんなのおうちを移動しなければならなくなった。子ども達に伝えると、「えー」「みんなのおうちなくなっちゃうの?」と心配な様子だった。みんなのおうちの場所を変えて引っ越ししようと話し、子ども達と一緒に引っ越し作業を始めた。

担任の思い

- ・場所が変わると遊びも変わってしまうのではないか。
- ・子ども達の思いが途切れてしまうのではないか。



子どもの姿

- ・砂場にたくさんの砂が入る事は子ども達がとても喜んでいました。
- ・山盛りの砂が入ると、遊びたい!と言う子ども達だった。砂が入った後すぐに砂場に遊びに行くと、山を掘ったり、水を流したりしながら新しい遊びが始まった。

<みんなのおうちはどうしよう>

砂場の遊びも盛り上がった後、子ども達は、みんなのおうちの引っ越しを始めた。場を変えたことで、この日はおうちから電車のイメージになった子ども達だった。



ばんださんも乗っていいよ。



ご乗車ありがとうございます。特急やくもです。

<気づき>

教師の思いとして、砂場に砂を入れて環境が変わることで、遊びが中断するのではないかと心配した。場が変わってもまた新しい遊びを創りだしていく子ども達の姿が見られた。教師も子ども達の遊びの変化を見守り、共に楽しむことで、みんなのおうちという共通のイメージの中でまた新しい遊びが生まれていくことを知った。計画とはずれたが、柔軟に対応していくことで子ども達の遊びが広がりをもった。また指導計画を見直し、子どもの思いを拾い上げながら次のみんなのおうちの遊びにつなげていくと考えた。

【みんなのおうちの設計図を描こう】

6月20日

子ども達の中でみんなのおうちはなんでもできる場、安心できる場になっていると感じた。そこで、子ども達に「自分の理想のみんなのおうちを絵で描いてみよう」と声をかけ、みんなのおうちがもっと楽しいものになるように考えた。(しかけ)

→ねらい

- ・自分の考えを具現化する。
- ・自分と違う友達の考えにも触れることができる。





できた絵を見ながら、あのねタイムで、自分で描いたみんなのおうちのおすすめポイントを話させることにした。

- 「洗濯機を置きたい。」
- 「スケーターの駐車場を作りたい」
- 「木をたくさん使ったおうちにしたい」
- 「うさぎの形をしているよ」
- 「4階建てのおうち」
- 「みんなで「おーい。」ってできるおうち」
- 「駐車場が自動で開くおうち」

と思いを次々に話す姿が見られた。保護者にもその絵が分かるように玄関に掲示した。子ども達の思いを具現化することで、よりこうしたいとい明確な意欲につながっていったと思われる。

D児「4階建てにするには階段もいるよね。はしご作ろうかな。」

G児「僕たちだけでこの家が作れるのか？」

A児「だって木とかないしどうする？」

E児「先生、木をたくさん用意せんとできらんよ。」

T「そうだね。きりんさんだけでこのおうちを作るのは大変だよね。材料もないし。しかも7つ作るのは大変だよね。どうする？」

D児「お母さんに聞いてみようかな。」

E児「7つは無理か〜。作る場所ないし。じゃあ1つにするのかな。」

B児「お父さんならできるかもしれん。金づち使えるし。」

- ・保護者に頼んでみたいという思いが出てきた。
- ・7つの考えをもとにみんなのおうちをつくる考えが出てきた。

- 上図の絵や子ども達の思いを全職員に伝え、園でみんなのおうちづくりが実現できないか相談をかけた。
- ・保護者から手伝いたいという話もいただいた。その事をPTA会長に相談すると、「子ども達のためなら保護者に声をかけて協力しよう」と回答を受ける。
- ・子ども達にもみんなのおうちをぼかぼか広場に作れることになったと伝える。

【“みんなでおうち”を一つの設計図にしよう】

6月22日

一人一人が描いた夢のみんなのおうちの設計図を実現させるために、7つ作ることは無理と考えた子ども達の思いを汲み、今度はみんなで1つの設計図にする。

- ・ここだけはゆずれないポイント
- ・みんなで遊ぶためにはどんなおうちだと楽しいか？

ということを考えながら子ども達はあのねタイムを始めた。

子どもの姿と教師の関わり	教師の思い（・）や援助（○）
<p>6月22日</p> <p>T「みんなのおうちの絵を描いたが。みんなの絵がどれも素敵だなと思ったんだけど、全部は作ることも出来ない話になったよね。だからみんなの絵を一つにしてみようかなと思うんだけど。」</p> <p>T「ここだけはゆずれないポイントを話して。」</p> <p>最初はなかなか言葉が出ない子ども達</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の考えた家をどのようにして一つにしたらよいか迷っている。 ・自分の考えだけ言ってよいか分からないと思っている。 <p>T「みんなはどんなおうちで遊びたい？何個でも言っているよ。」</p> <p>D児「みんなが寝られる場所がある。」</p> <p>D児が話し始めるとみんなが自分の思いを話し始めた。</p> <p>E児「お花のおうちにしたい。」</p> <p>F児「飾りもつけたいね。」</p>	<p>○思いのままに話してみしてほしいことを伝える。</p> <p>○子ども達の考えをまとめるためには…</p> <p>1つの模造紙に自由に描いていく。</p> <p>→自分だけの考えではできないこと</p> <p>→みんなの考えも取り入れようとする考えを考慮して描く姿が見られた。</p>



みんなで作ったみんなのおうち設計図

みんなの設計図を見て、おうちの人も一緒にみんなのおうちを作ってくれることになったと伝えると、子ども達にとっても喜ぶ様子が見られた。

・子どもの思いを実現させていきたい。しかし、焦ってしまうと教師の考えが先行してしまうので、子どもの考えに合わせた外部、保護者との調整や具体的な指導計画が必要だ。

○子ども達の思いが少しずつ形になってきている。この思いを実現させるために、教師はできる保障を取り付け、会長、大工さんと打ち合わせを重ねた。

・地元の方の協力

→地元の大工の方にもPTA会長から声をかけてもらい、地元の材木をもらったり、当日の指導もしてもらえることになった。

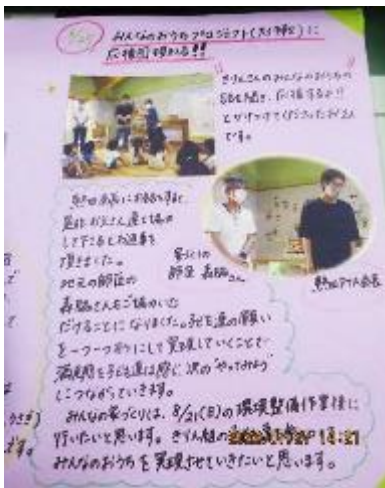
<気づき>

子ども達が個々の家を描いたことで、子ども達一人一人の考えを出すことができた。そこからどのように一つにしたらよいか考えた時に、少し教師の思いが強くなりすぎてしまい、子ども達の戸惑う姿が見られた。教師は焦らずに、子どもと共に考えるという姿勢を大切にしなければならぬと感じた。

また、大人の助けも必要と感じた子ども達の思いを汲みとり、PTA会長に相談をもちかけると、とても協力的に引き受けて下さり、地域の方、保護者の協力を得られることになった。たまゆの地域力に触れることができ、子ども達の考えた家づくりの実現にまた一歩に近づくことが出来たと考える。

【みんなのおうちプロジェクトに応援団現れる】

6月27日



- ・子ども達と家づくりの師匠(地元の大工さん)の出会いの場だった。子ども達は自分達が考えたことが少しずつ実現していく事を感じ、すごく喜んでいました。
- ・師匠と相談していると、「子ども達の願いを少しでもかたちにさせていただけると嬉しい。」と言っていた。
- ・保護者にも呼びかけ、8月21日の環境整備作業に合わせて、きりん組の子ども達と保護者でみんなのおうちを建てることになった。



「お父さんや師匠と家を建てるんだ。」
 「本当にできるのかな・・・。」
 「楽しみだな。」
 「ぼくのお父さんにも言うておくれ!!」
 「8月にみんなで作るんだね!!」

ワクワクする気持ち、実現できる嬉しさを感じてきている。
 おうちの人の協力も嬉しい。

【おうちプロジェクト開始】

8月21日

夏の奉仕作業に合わせて、みんなのおうちプロジェクトを行った。保護者やおうちの師匠と共に年長児が考えたみんなのおうちを作る作業を行った。



師匠にのこぎりの使い方
教えてもらったよ。

わ～！大きい！
本当にたつのかな？



木をたたくといい音
するね。



年長だけでなく、
ほぼ全園児の保護者さん
が手伝ってくれました。



金づちも
できた！



<気づき>

環境整備作業の日に年長児にも来てもらってみんなのおうちプロジェクトを行った。子ども達は、師匠が到着すると、「わ～！木がいっぱい！」「師匠が来た！」と喜ぶ様子が見られた。子ども達の思いを実現させようと、ほぼ全保護者の方が参加して下さった。保護者と一緒に木を切ったり、組み立てたり、木槌でたたいたりして少しずつみんなのおうちが出来上がってきた。子ども達は自分達で考えた事が実現できる喜びを感じたり、保護者や地域の方が自分達のために協力してくれたことを感じたりしていた。徐々に出来上がっていくみんなの家を見て、「ここに“はしご”もつけたい。」「木でキッチンも作りたい。」とさらなる製作意欲につながっていている様子が伺えた。



事例1 <考察>

この事例を通して、子ども達はみんなのおうちを作る中で、自分の思いが実現していき、周りに認められ自己肯定感につながったり、友達の考えを受け入れたり、友達と一緒に考えを出し合い試行錯誤しながら、遊びを進めて行ったりすることを楽しんでいった。

そして、みんなのおうちの遊びでは、「自分の好きな遊びをとことんできる」という満足感を感じることができた。そこから、友達と一緒に冷蔵庫を作ったり、温泉を作ったり看板を作ったりすることで、「相手の思いを知り、取り入れたり、ぶつかり合ったりする」経験をしながら、自分の考えに自信をもつことにつながったと感じた。また、保護者や地域の人たちの熱心であたたかい関わりを通して、もっと遊びを楽しみたいものにしたと、さらなるやってみようという意欲につながっていった。

子どものやりたい・やってみたい気持ちをまずは教師が見逃さずに捉え、実現に向けて子どもと共に楽しみながら取り組むこと、また、焦ることなく子どもの思いや考えを中心に進めていくことの大切さを感じた。その過程で、時に立ち止まったり、少し戻ったりしながら、子どもの思いが少しずつ形になって叶っていくことが、自己肯定感、満足感、充実感につながるのだと分かった。一人では実現できないことでも友達と考えを出し合い、周りの協力や助けを借りて少しずつ叶っていくということを子ども達は感じる事ができたと思う。また、周りの友達の気持や思いに気付く中で、自分を大切に、周りの人も大切だと感じる事ができるようになってきているように感じる。

Ⅶ 研究の成果と今後の課題

＜内容Ⅰ 「自分を大事にするための援助」について＞

- ・子ども達が自分を大事にするためには、一人一人を大事にする教師の関わりが大切であると感じた。記録の取り方を工夫することで、子どもの姿の背景を分析したり考察したりすることができ、それが子どもの思いや育ちを捉え、一人一人に合った支援につながった。また、教職員同士で写真の記録を用いた「きらきらの会」（子ども達の良さ、気になる所を話し合う場）において、多様な視点から子どもの姿を捉えることで、教職員が同じ思いで子ども達一人一人を支えることや、園全体で一人一人を大事にした関わりにつながることができている。このように、教師と子ども、教師間のあたたかい関わりや、教職員で子ども達を見ていくという姿勢を示すことで、子ども達一人一人の「自分は認められ受け止めてもらっている、大事にもらっている」という実感につながるとともに、自尊感情や自己肯定感を育んでいくと考える。

＜内容Ⅱ 「みんなを大事にするための援助」について＞

- ・「みんなも大事」という思いを育むためには、子ども達一人一人が「自分は大切にされている存在である」と実感するとともに、自信をもつことができる関わりをしていくことが基盤になることが分かった。実践を通して子ども達の主体性を大切に生活や環境を創っていくためには、子ども達の実態や思いを捉え、それを踏まえたねらいを教師がもつことが大切であると再認識できた。遊びや活動の中で子ども達が“もっとやってみよう”とさらなる意欲をもち、思いを実現できるような教師の意図的な関わりや導入、環境構成によって、子ども達が自分たちで考えを出し合っ、遊びや活動を進めていく姿につながることができた。
- ・従来からの行事をその年々の子どもの実態や興味関心に合わせて一つ一つ見直しをしていながら子どもと共に一つ一つつくっていくことで、より満足感、充実感のあるものにできると感じた。また、異年齢との日々の関わりを大切にしてきたことで、憧れや思いやる気持ちが育まれることに加え、自分のことだけでなく相手がどう思うかなど考えるようになり、相手に伝わるためにはどうしたら良いのかなども考える姿が見られるようになってきた。
- ・「あのねタイム」では、子どもの様子を捉え柔軟に対応していくことで、3歳児は安心して自分を出す、4歳児は自分の思いを素直に出し友達の気持ちに気づく、5歳児はみんなで考えを出し合っ話を進めていく、といった発達段階に応じて子どもが経験する内容も充実させていくことができた。「あのねタイム」の中でみんなに自分の感情を受け止めてもらえるという安心感を積み重ねていくことが、いつでも伝え合い考え合う集団になっていくと感じている。今後も発達や実態に応じた「あのねタイム」を工夫していながら子ども達一人一人が思いをしっかりと表出し、仲間と伝え合えるようにしていきたい。

＜内容Ⅲ 「保護者、地域との連携」について＞

- ・保護者や地域が園の行事に関わることが近年感染症拡大予防の観点から少なくなってきた。そこで、子ども達の園での様子を写真に教職員のコメントを添えたものを玄関に掲示するなど、伝え方を工夫したことで、園の様子をより理解してもらうことができ、保護者の安心感や園への信頼感につながった。また、写真があることで子ども様子について、教師の考えを保護者とタイムリーに共有することができ、子どもの成長を一緒に喜び、同じ思いで支えるといった教師と保護者との間にあたたかい関わりが生まれたと感じている。また、視覚的媒体により子どもと保護者が日々の園での様子について話すきっかけになった。
- ・「みんなのおうち」の活動で保護者の参加することや日々の園での子どもとの関わり、地域の田んぼでの活動や絵本の読み聞かせ、学園との交流など、温かい保護者、地域との関わりを通して、子ども達は安心して玉湯という地域で過ごしていることを再認識できた。今後もオール玉湯という意識を共有して、子ども達をみんなで支えていきたい。

＜内容Ⅳ 「教師の保育の質の向上」について＞

- ・日々、保育中や保育後などに子どもの良さ、楽しい遊びの場面、気になる様子や、保護者対応について教職員で情報交換をすることで、多様な視点・価値観に触れ、もう一度自分の保育を見直すことが出来、自分の気付かない視点や子どもの見方に気づき、お互いの学びになった。このようないつでも話ができ、相談できる教師間の連携が保育の質の向上につながっている。
- ・周りの人とのあたたかい関わりが、自己肯定感を育むためには不可欠だということを再認識できた。家庭、地域、教職員が子ども達にとってあたたかくかかわってくれる存在となることで、居心地の良いたまゆ幼稚園になると考える。そのためにも、教職員一人一人が生活や保育を日々再構築しながら今後も実践を積み重ねていき、保育力を向上させていきたい。
- ・実践を通して、子ども達にとっても、教職員にとっても周りの人とのあたたかい関わりは自己肯定感につながっていくと再確認できた。このような、玉湯のあたたかい関わりが続き、“ぼかぼかたまゆっこ”が育っていくよう、今後も子ども達が“自分も大事、みんなも大事”と感じることができる援助を探り、実践を積み重ねていきたい。